

Title	清華簡『良臣』・『祝辞』の書写者：国別問題再考
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2016, 62, p. 52-73
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61973">https://doi.org/10.18910/61973</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔出土文献研究〕

## 清華簡『良臣』・『祝辞』の書写者

——国別問題再考——

福田哲之

### 一、問題の所在

一九九三年出土の郭店簡<sup>〔注1〕</sup>によって、楚墓出土の戦国竹書に楚国通行の楚系文字とは異質の非楚系文字が含まれることが明らかとなり、テキストの成立・流伝にかかわる国別問題が注目されるにいたった。その後、新たに上博簡も加えて研究が進められ、他地域で成立し楚に流伝した他地性の戦国竹書には、非楚系文字を具有する例が、少なからず認められることが明らかにされたのである<sup>〔注2〕</sup>。

ここで確認しておきたいのは、これまで知られてきた郭店簡・上博簡は、すべて楚系の用字習慣をもつ楚人が書写したものと見なされている点である<sup>〔注3〕</sup>。したがっ

て、そこに認められる非楚系要素は、基本的に書き手の側ではなく、書写者が依拠したテキスト（底本）からの影響とみることができる。

同じ状況は、郭店簡・上博簡のみならず清華簡にも見いだされる。例えば『筮法』には、「夕」・「返」・「祖」などの諸字に晋系文字の特徴がみられることが指摘されているが<sup>〔注4〕</sup>、同時に「左」字を「口」に従う形体に作る点や「𠂔（見）」と「𠂔（視）」との使い分けなど、多くの点で楚の用字習慣との合致が認められる。また書法風格の面においても、一貫して楚簡に特徴的な円転様式をそなえ<sup>〔注5〕</sup>、このテキストが楚人の書写にかかり、その中にみえる晋系文字の特色は底本の影響をうけたものであることが知られる。

こうした状況において注目されるのは、清華簡『良臣』に文字・書法の両面で晋系文字との緊密な関連が認められる点である。仮に『良臣』に書写者が楚人であることを示す明瞭な痕跡が認められずれば、『良臣』は楚の用字習慣をもつ楚人ではなく、晋の用字習慣をもつ非楚人の手になる可能性が生じる。そして同じ可能性は『良臣』と同写・同冊とされる『祝辞』(注6)にも想定されよう。この仮説に従えば、『良臣』・『祝辞』に認められる非楚系要素は、基本的にテキストではなく書き手の側に由来することになる。

このように一口に非楚系文字具有テキストと言っても、書写者がどのような用字習慣をもつかによって、そのテキストの言語的性格は大きく異なってくる。『良臣』・『祝辞』は、楚人の書写者を前提として論じられてきた従来の国別問題に再考をうながす貴重な資料と言えよう。

小論ではこのような問題意識にもとづき、『良臣』・『祝辞』の文字・書法について分析を加え、両篇の性格とその資料的意義を明らかにしてみたい(注7)。

## 二、『良臣』の文字形体

本章では『良臣』の文字形体について分析を加える。

はじめに『清華大学蔵戦国竹簡(参)』(以下『清華参』と略記)にもとづき、その概要を記しておく(注8)。

『良臣』は全十一簡、文字に缺失はない。黄帝から春秋期までの著名な君主に仕えたすぐれた臣下を記しており、その内容から仮に「良臣」と題した。簡文は連続して書写され、中間に黒の横線で二十の小段に分けられ、黄帝から周の成王までは歴史の順序、春秋の晋の文公から鄭の子産の師・輔までは国別の排列となっている(最後の楚の共王の一条は後補にかかるようである)。竹簡の文字は三晋系の写法に属し、例えば「百」字はすべて「全」に作っている。篇中には「子産之師」「子産之輔」など鄭の子産との関連が詳記されており、作者は鄭と密接な関連をもつ人物であった可能性がある。

劉剛氏(注9)はこの『清華参』の指摘を承けて、文字風格・文字形体・用字習慣の各方面から分析を加え、晋系文字との関連を裏付けている。『良臣』が晋系文字の特色をそなえたテキストであることは、劉氏の研究によってほぼ立証されたといつてよいであろう。

それでは逆に『良臣』と楚系文字との関係はどうであろうか。この点を明らかにするために、まず『良臣』の全用例(異なり字数一四三字)から楚系と晋系との間で

形体面において明瞭な相違をもつ文字を抽出し、それらを「A類」晋系と共通する文字と「B類」楚系と共通する文字とに分類した。その結果を文字ごとに整理し、通し番号（丸囲み数字）の下に相違点を簡潔に記した表を以下に示す。なお※を付した文字は、すでに先行研究において指摘されたものであり<sup>〔註〕</sup>、分析に用いた資料については、末尾の「参考文献」に掲げた。

「A類」晋系と共通する文字





① 「哀」・「口」の位置の相違。





楚系	晋系	『良臣』
 包山145	 哀成叔豆	 08
 郭店五行17		

② 「後」…楚系は「彡」に従う。






楚系	晋系	『良臣』
 包山227	 侯馬	 05
 郭店老子甲16		 09

③ 「卑」…晋系は「寸」に従う。





楚系	晋系	『良臣』
 郭店緇衣23	 侯馬	 10
 救秦戎鐘		

楚系	晋系	『良臣』
 包山234	 侯馬	 06
 帛書乙 7-77		







⑤※ 「寺」…晋系は「寸」に従う。

楚系	晋系	『良臣』
 包山138	 侯馬	 01
 上博三 中弓14		 08

④※ 「史」…楚系は上部を「卜」に作る。

楚系	晋系	『良臣』
 包山250	 璽彙 1642	 10
 望山M1 116		






⑦※ 「肥」…晋系は右旁が垂直に折れる。

楚系	晋系	『良臣』
 包山137	 中山円壺	 08
 郭店 忠信7	 貨系 1346	 10








⑥※ 「百」…晋系は「全」に作る。

楚系	晋系	『良臣』
 包山99	 貨系364	 05
 郭店 尊德28	 廿三年 襄城令矛	

⑨※ 「向」…晋系は上部を八型、楚系はM型に作る。

楚系	晋系	『良臣』
 包山226	 中山円壺	 08
 郭店 老子丙6	 靈壘 1651	

⑧※ 「左」…楚系は「口」に従う。

楚系	晋系	『良臣』
 包山167	 靈壘 1825	 05
 望山M1 170	 靈壘 1399	 05
		 07


⑩※ 「範」…晋系は右旁の上部に「山」を加える。

楚系	晋系	『良臣』
 棚之鼎	 靈壘2549	 03
 屈叔沱戈	 八年 旨令戈	 05
		 08
		 09

⑩※ 「弔」…晋系は右下に飾筆「ノ」を加える。









楚系	晋系	『良臣』
 「邦」 郭店 老子乙18	 「邵」 中山方壺	 「邦」 侯馬
 「郢」 包山7	 「郢」 聖彙 2150	 「邦」 袁成叔鼎
		 「郢」 06
		 「邦」 09
		 「郢」 11
		 「邵」 04
		 「郢」 03

⑬ 「邑」旁位置…楚系の大部分は左側に置く。

楚系	晋系	『良臣』
 郭店 緇衣12	 珍秦戰 236	 01
 九店M56 39	 聖彙 5124	

⑫ 「禹」…楚系は下部に「土」を加える。

ここでB類の「相」字について分析を加える。「良臣」は楚系と同様「目」の下に飾筆を付さない形に作る(注13)。この形体は、甲骨文および西周金文を踏襲するもので秦系とも共通する。一方、晋系の用例はほぼすべてが「目」の下に「一」または「三」の飾筆を付しており、この形体は晋系の特色の一つの見なされている(注12)。このように「良臣」の「相」は、通常の晋系文字とは形体を異にするが、留意すべきは、晋系にも一例(十七年相邦鉞)『良臣』と同様の形体が認められる点である(注13)。これを踏まえれば、晋系内においても例外的に初形にもとづく飾筆を付さない写法が行なわれた可能性

楚系	晋系	『良臣』
 帛書甲 7-77	 中山方壺	 01
 包山171	 聖彙 1859	 09
 郭店 老子4	 十七年 相邦鉞	

① 「相」…晋系は通常「目」の下に飾筆を付す。  
 「B類」楚系と共通する文字

も考慮され、『良臣』の「相」の形体を直ちに楚系文字の影響とみることは慎重な検討が必要であろう。

以上の分析から、『良臣』の文字形体は一部の例外を除いて、その大部分が晋系文字と合致することが明らかとなる。

### 三、『良臣』の用字習慣

次に『良臣』の用字習慣の検討に移る。蘇建洲氏は『良臣』（簡5）が昭王の「昭」を、楚系の「邵」とは異なる「輶」に作ることから、底本は楚国のものではないことを指摘している<sup>〔注15〕</sup>。また劉剛氏は、『良臣』の用字が楚系とは異なり晋系と合致する例として、以下の三例を挙げ、

- 1、簡2 伊尹（尹） 簡5 令尹（尹）
- 2、簡7 寧（越） 王勾踐
- 3、簡6 莖（隰） 朋

さらに先の蘇建洲氏の見解を引いた後、「輶」字が晋系文字では人名に常用され、とくに三晋の韓国との間に密接な関係がうかがわれることを指摘している<sup>〔注15〕</sup>。

このように『良臣』は、その内容面の特色から、人名を中心とする用字習慣の検討において、きわめて有効な

資料と言える。そこでまず蘇建洲氏の指摘を踏まえ、『良臣』にみえる楚王の諡号（成王・共王・昭王）を他の戦国竹簡と比較すると「表1」のような結果となる<sup>〔注16〕</sup>。

〔表1〕楚王の諡号とその用字比較

諡号	『良臣』	『楚居』	『繫年』	上博簡
成王	成王	成王	成王	『成王為城濮之行』 成王
共王	恭王	鞞王	鞞王・龍王	—
昭王	輶王	邵王	邵王	『昭王毀室』 邵王

蘇建洲氏の指摘する「昭王」以外に「共王」についても『良臣』と『楚居』・『繫年』との間に用字差異が認められるが、現時点では十分な用例が得られないため、晋系の用字との関係は不明とせざるを得ない。あくまでも推測の域を出ないが、前章における文字形体の分析や上述した用字習慣にかかわる先行研究などを踏まえれば、楚系の「鞞（龍）王」に対して「恭王」は晋系の用字に該当する可能性が指摘されよう。

次に、楚王の諡号以外の人名や官名について、『良臣』と他の戦国竹書とを比較すると「表2」のような結果となる<sup>〔注17〕</sup>。



〔表2〕 人名・官名にかかわる用字比較

人名・官名	『良臣』	『繫年』	上博簡
齊桓公	齊桓公	齊桓公	—
越王句踐	暉王句踐	戊公句踐	—
大宰	大宰	大判	『東大王泊旱』 大判

『繫年』にみえる齊桓公の「越(桓)」、越王句踐の「戊(越)」、「蔑(踐)」、『繫年』および『東大王泊旱』にみえる大宰の「判(宰)」はいずれも楚系の用字と見なされ、これに対して『良臣』はそれぞれ「桓」・「暉」・「賤」・「宰」と用字を異にする。現時点では、これらのうちで晋系との関係を裏付け得るのは、劉剛氏が指摘する「暉(越)」のみにとどまるが、他の二例も同様に晋系の用字に該当する可能性が指摘される。

ただしここで留意されるのは、中山王鼎銘文の「越(桓)王」や中山王玉器墨書の「越(桓)子」などの用例から、晋系では「桓公」の「桓」の表記に楚系と同様「越」が用いられたことが知られる点である<sup>〔注18〕</sup>。先に見たように『良臣』では「越」とは異なる「桓」が用いられており、この用字は現在までのところ他系(国)に

おいても見いだされなければならないようである<sup>〔注19〕</sup>。用例数の制約から断定は差し控えなければならぬが、おそらくこれは同系内の異例と見なされ、必ずしも『良臣』と晋系の用字習慣との関連を否定する根拠とはならないであろう。

この点についても先の諸例と同様、今後の検証が俟たれるが、少なくとも『良臣』の多くに非楚系の用字が認められることは、これまでの検討を通してほぼ明らかに得たのではないだろうか。

#### 四、『祝辞』の文字形体

続いて、『祝辞』の分析に移ろう。同様に『清华参』<sup>〔注20〕</sup>にもとづき、その概要を記しておく。

『祝辞』は『良臣』と書写者を同じくし、もとは一編竹簡に『良臣』とともに連写されていたと見なされる。『祝辞』は五簡からなり、各簡ごとに巫術の類に属する祝辞一則が書写されている。最初は「恐溺」すなわち溺水を防ぐ祝辞、次は「救火」の祝辞、後半の三則はいずれも矢を射るときの祝辞で、敵人を射る際に用いるもの、禽獸を射るときに用いるもの、甲革を射るときに用いるものの三種に区






分される。祝辞はまた呪語でもあり、多くは晦渋で理解できないものもある。

このように『祝辞』は巫術類に属しており、内容を十分に把握したい部分が残されている。また類型的な文體をもち、とくに後半の三則は共通の形式からなるため、限定された用例にもとづく分析となる。





それでは『良臣』と同様の手順により、『祝辞』の全用例（異なり字数六十四字）の文字形体について分類・整理した表を以下に示す。

〔A類〕晋系と共通する文字








① 「童」…楚系は「里」の下部を「壬」形に作る。





楚系	晋系	『祝辞』
 望山M2 13	 聖壘 2264	 03
 包山34		 04
		 05

②※ 「左」(前章『良臣』⑧重出)






楚系	晋系	『祝辞』
 楚帛書 殘片	 温鼎	 02
 聖壘 0162	 公朱左 自鼎	

③ 「虞」…晋系は下部を「寸」に作る。









楚系	晋系	『祝辞』
 望山M1 152	 侯馬	 03
 包山202		 04
 王孫誥鐘		 05

楚系	晋系	『祝辞』
 郭店 性自19	 兆域図版	 01
 上博 君人08		

⑤ 「堂」…晋系は「土」に作る。

楚系	晋系	『祝辞』
 九店 56-39	 璽彙 3654	 02
 帛書丙 92		
 郭店 唐虞10		

④ 「火」…楚系は上部に横画を加える。

楚系	晋系	『祝辞』
 包山204	 三十二年 坪安君鼎	 01
 郭店 老子甲16	 坪安君鼎	 03
 郭店 成之35	 信陽戈	 04
		 05

① 「也」…楚系は上部の横画が左右に出ない。

楚系	晋系	『祝辞』
 信陽3	 璽印菁華6	 01
		 03
 包山126	 二年 皇陽令戈	 04
		 05

⑥ 「陽」…楚系は「土」に従う。「日」の下に横画を二本加える例は晋系に見える。

ここでB類の「也」字について分析を加える。『祝辞』の「也」は、すべて楚系と同じく上部の横画が左右に出ない形に作る<sup>(注22)</sup>。これに対して晋系の三例は、すべて横画が左右に出る形に作り<sup>(注23)</sup>、この形体は齊・秦の各系(国)にも共通する<sup>(注23)</sup>。

このように『祝辞』の文字形体は大部分が晋系文字の特色と合致するが、「也」の形体については晋系とは異なり、楚系文字の特色が認められる。

## 五、『祝辞』の用字習慣

上述のように『祝辞』は呪語という特異な内容から、釈読を確定しごたい部分が少なからず残されており、用例数の制約もあつて、現時点ではいかなる系(国)の用字習慣を反映したものであるかを明確に把握することは困難である。ここではあらかじめそれを断つた上で、簡1の「弱(溺)」字について若干の検討を加えてみたい。

『祝辞』第一則が、落水淹没を防止するための呪語であり、簡1の冒頭二字を「忪(恐)弱(溺)」と釈することは、第二則の「救火」との対応関係からも異論のないところであろう。そこでまず「弱(溺)」字の関連資料を以下に列挙する。

○『祝辞』

〔資料1〕



簡1「弱(溺)」

○楚系

〔資料2〕



包山172「弱」

〔資料3〕



郭店「老子」甲簡8「弱」

〔資料4〕



上博七『武王踐阼』簡8「弱(溺)」

○非楚系

〔資料5〕



侯馬「洵」人名

〔資料6〕



中山王鼎「洵(溺)」

〔資料7〕



晋 陶彙6・81「休」

〔資料8〕



郭店「語叢二」簡36「休(弱)」

楚系では強弱の弱の意をあらわす文字として「黎」が用いられており<sup>(注25)</sup>〔資料2・3〕、これが沈溺の意をもつことは、上博七『武王踐阼』の用例〔資料4〕<sup>(注26)</sup>

から裏付けられる。一方、晋系では「沟」が用いられ  
「資料5」<sup>〔註27〕</sup>、この文字が沈溺の意をもつことは、中山  
王鼎銘文「資料6」の用例<sup>〔註28〕</sup>から裏付けられる。これ  
らを踏まえれば、『祝辞』の「弱(溺)」字「資料1」は  
楚系と近似し、晋系とは異なる可能性が考慮されよう。  
ただし両者を詳細に比較すると、『祝辞』の「弱(溺)」  
「資料1」は、「勿」ではなく「人」に従っており、楚系とは  
構成要素が異なっている。また「水」の位置も楚系では下  
部に横向きに配置されるのに対して、『祝辞』では中央に  
縦向きに配置されており、写法も異なっている。

ここで想起されるのは、晋・齐鲁・燕などの諸系(国)  
では、「弱(溺)」と同音の「休」が行なわれ「資料7・  
8」<sup>〔註29〕</sup>、「沈溺の本字」<sup>〔註30〕</sup>と見なされている点である。  
これらを踏まえれば、『祝辞』の形体は「休」に「弓」を  
加えた繁体とみられ、楚系とは系列を異にする可能性が  
指摘されよう。

このように『祝辞』の用字については、十分に把握し難  
い点が多く残されているが、少なくとも楚系固有の用字と  
合致する明確な例は見いだされないようである。あくまで  
も間接的な推測に過ぎないが、『祝辞』の釈読の困難さは、  
その内容の晦渋さとともに、秦や楚とは異質の用字習慣  
をもつところに原因の一端があるのではないだろうか。

## 六、『良臣』・『祝辞』の書法

上述のように『良臣』と『祝辞』とは同じ書写者によ  
るものと見なされており、書法風格は完全に一致する。  
本章では両篇の書法について分析を加え、齊系文字との  
関係を明らかにしてみたい。

劉剛氏は『良臣』の文字風格について、

整篇文字筆劃豊中銳末、用筆謹飭、和三晉一系的侯  
馬盟書字形很是類似、而全無楚文字特種以曲綫取美  
的線條特徵。

と述べ、具体例として「又」字を挙げて『良臣』と晋  
系・楚系とを比較し、晋系との共通性を明らかにしてい  
る<sup>〔註31〕</sup>。風格面の分析はこの一例にとどまるが、その理  
由について、劉氏は以下のように説明している。

文字的風格雖然是戰國諸系之間的重要差別之一、但  
因為其抽象難以把握的特點、往往讓人有不知所云之  
感。下面我們再從文字形體和用字習慣兩個方面來說  
明《良臣》與晉系文字之間的關係。

確かに文字の風格は、その特色を全体として捉えよう  
とすれば、抽象的で理解し難い面をもつことは否めな  
い。しかし風格上の特色を形成する具体的な諸要素(例

えば、運筆の特徴・点画の構造・一字の構成など）に着目し、それらについて個別に分析を加えることにより、一定の客観性をもった結論を導くことが可能である。

また、本稿が対象とする晋系文字の場合は、春秋戦国期の筆記資料がほとんど皆無である齊系文字や燕系文字とは異なり、幸いにも春秋末の侯馬盟書・温県盟書や戦国中期後半の中山王墓墨書玉器等などの筆記資料が存在し、運筆や点画の構造について具体的な比較分析が可能である。


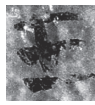




さらにこれまでの国別研究で明らかにされたように、書写者が楚人であっても、もとのテキストの影響によって、その転写本に非楚系文字の特色がそなわる例があり、文字形体や用字習慣は、必ずしも書写者の国別と直結しない場合のあることも考慮しておく必要がある。実際、郭店簡・上博簡では、書写者は楚人であるとの前提から、文字形体・用字習慣の検討に重点が置かれ、書法面の分析はあまり必要とされなかった。しかし本稿のように、書写者が戦国諸系（国）のいずれの文字を習得した人物であるかを明らかにしようとする際には、文字形体・用字習慣に加えて書法面の検討が不可欠となる。

はじめに全体的な観点から指摘しておきたいのは、両篇は共通の書法様式に従い、一定の速度とリズムで謹直

に書写されており、書写者はきわめて安定した書法技能を有していたと見なされる点である。このことは重出字の形体に、ほとんど揺れが認められないことから裏付けられる<sup>〔注2〕</sup>。

それでは以下、書法の特徴を形成する要素について、個別に関連の図版を掲げた後、それにもとづく分析を記していく。まず最も重要な基本点画である横画を取り上げる。











① 「王」字・「皇」字

楚系	晋系	『良臣』
 <p>包山2</p>	 <p>「王」 墓器 中山王 玉 中墨書</p>	 <p>04</p>
 <p>望山M2 45</p>	 <p>温県</p>	 <p>01</p>

『良臣』の「王」字・「皇」字を例に横画を分析すると、起筆を強く打ち込んでそのまま真横にスッと引き抜く楔形の筆画構造が認められる。同じ状況は『祝辞』にも明瞭に認めることができる<sup>〔②参照〕</sup>。これは晋系の








筆記文字である中山王墓墨書玉器や侯馬盟書・温県盟書の筆画と酷似し、両者は共通の様式をもつことが知られる。これに対して楚系は、右廻転の運筆を基調とし、やや右上がりに湾曲し、起筆部分と収筆部分が尖って送筆部が膨らんだ、いわゆる「豊中鋭末」の筆画構造をもつ。先に引用したように劉剛氏は『良臣』の筆画を「豊中鋭末」と表現するが、これはむしろ楚系文字にあてはまる特色である<sup>注33</sup>。

② 「言」字・「音」字

楚系	晋系	『祝辞』	
 「言」 包山2	 「辛」 温県	 「音」 05	 「言」 03
 「言」 郭店 緇衣29	 「言」 侯馬	 「音」 05	 「言」 04
 「音」 包山214			 「言」 05

こうした運筆・筆画の特色をよく示す例として、次に『祝辞』から「辛」を構成要素にもつ「言」字・「音」字を取り上げる。注目されるのは「祝辞」では「辛」の下部「十」の横画を、左右それぞれに楔形構造の筆画を用いて「V」字型に作る点である。この写法は、晋系の温県盟書や侯馬盟書と類似するが、楚系の筆記文字では、大部分が左から右へ掬い上げるように一筆で書かれており、両者の運筆・筆画は大きく異なっている。














③ 「卽」字

楚系	晋系	『祝辞』
 「既」 包山245	 「既」 袁成叔鼎	 「既」 02
 「即」 望山M2-50	 「既」 鷲部鐘	 「即」 09
	 「即」 貨系2476 三孔布	

ここからは複数の文字に共通する偏旁の構造に注目する。『祝辞』の「卽」は上部の「白」に対して下部が縦に長い長脚体を示す。同様な形体は晋系文字にも見いだ
















されるが、通常の楚系にはこのような長脚体の様式はほとんど認められない。

④ 「心」（偏旁を含む）

楚系	晋系	『良臣』『祝辞』
 「心」郭店六德41	 「心」璽彙4500	 「惇」良臣06
 「心」包山218	 「心」侯馬	 「心」祝辞03
 「恭」帛書乙8-86	 「心」温県	 「惇」良臣10
 「惇」九店M62 1-13		 「惇」祝辞01
		 「恭」良臣11
		 「惇」良臣06

『良臣』・『祝辞』の「心」（偏旁を含む）はすべて中央部分を上部が開いた「U」字型に作る。同様の「U」字型は晋系にも認められるが、楚系では大半が「U」の上部を絞った巾着型であり、両者の間には明瞭な差異が認められる。







⑤ 「宀」（うかんむり）

楚系	晋系	『良臣』
 「宀」郭店老乙15	 「宮」侯馬	 「定」09
 「宋」包山109	 「定」侯馬	 「宀」06
 「宮」秦家嘴M13	 「宋」侯馬	 「宮」03
		 「宀」10
		 「宋」07
		 「宮」03
		 「宀」11
		 「宀」08
		 「宀」03



『良臣』の「宀」(うかんむり)はすべてが下の文字をすっぽりと覆うような合掌構造をもつ。同様の構造は晋系の侯馬盟書にも認められるが、通常の楚系では角度を広く取って上部のみを覆う構造であり、両者の間には明瞭な差異が認められる。

⑥ 「定」字

楚系	晋系	『良臣』
 包山165	 新城八年 大令戈	 09
 郭店14 老甲	 靈彙 3061	
 靈彙 3644		

『良臣』の「定」字は、うかんむりの下の「疋」の第一画を「つ」のように曲げた特異な形体をもつ。同じ形体は晋系文字中にも見いだすことができ、両者の緊密な関係を示している。なお楚系には、包山165のように「疋」の第一画の収筆部に巻き込みをもつ例がみえるが、

これは楚系の特色である右廻転の運筆によって生じたものであり、特定の筆画のみを屈曲させる『良臣』とは性格が異なる。

以上、『良臣』・『祝辞』の書法を中心に、その特色を形成する諸要素について個別に分析を加えた。その結果、両篇は運筆・点画の構造・一字の構成など、ほぼすべての諸点にわたって晋系文字との間に顕著な共通性を示すのに対して、楚系文字との間にはほとんど共通性が認められないことが明らかとなった。こうした状況は、『良臣』・『祝辞』の書写者が、晋系書法を習得した非楚人であることを雄弁に物語っている。

結語

本稿では、『良臣』・『祝辞』について文字形体・用字習慣・書法の三方面から分析を加えた。その結果を総合的に踏まえれば、書写者は、晋系の用字習慣をもつ非楚人であり、両篇は文字・書法の両面においてきわめて純度の高い晋系テキストと見なされる。

本稿第二章および第四章で指摘した『良臣』の「相」字や『祝辞』の「也」字などの異例は、例えば上博簡『緇衣』のような、全体的に濃厚な非楚系文字の特色を

示しつつ、書写者である楚人の用字習慣がところどころで顔を出すといった状況とは異なり、晋の用字習慣をもつ非楚人の書写者が、楚系の底本の影響や用字の混淆などによって、例外的に楚系文字との合致を生じたものと考えられる。

以上の見解に誤りがなければ、『良臣』・『祝辞』はこれまで出土例のなかった晋系の戦国竹書として位置付けられ、今後、両篇を新たな資料に加えることにより、晋系の文字・書法に関する研究の進展が期待される。最後にそうした観点から、晋系文字と曾侯乙墓竹簡の文字・書法との関連について言及しておきたい。

曾侯乙墓竹簡は、一九七八年に湖北省隨県曾侯乙墓から出土した二四〇枚の竹簡で、葬儀の車馬兵甲等の器物を記載した遺策に属し、同出の罇鐘銘文や出土器物の形制、炭素測定などから下葬年代は、戦国早期の前四三三年と推定されている(注34)。従来、曾侯乙墓竹簡の文字は、典型的な楚国文字と見なされてきたが(注35)、近年、楚国文字の要素とともに相違点も認められることが指摘されている(注36)。

ここで注目したいのは、本稿で取り上げた『良臣』・『祝辞』と晋系文字との共通点のなかに、曾侯乙墓竹簡の文字と合致する例が見いだされることである。例えば

ば、本稿第二章・第四章で指摘した「哀」字の「口」の位置や「宮」などの「宀」(うかんむり)の構造をみると、曾侯乙墓竹簡の文字は楚系とは明確に異なり、『良臣』や晋系との間に顕著な類似性を示している[図1]。

[図1] 曾侯乙墓竹簡と『良臣』・晋系文字との共通性

楚系	晋系	『良臣』	曾侯	
 包山145	 哀成叔豆	 08	 31	「哀」(口の位置)
 包山202	 侯馬	 03	 143	「宮」(うかんむり)

このような観点から、あらためて曾侯乙墓竹簡の文字を分析すると、例えば「左」「右」の字形は、両者ともに「工」に従い、「口」に従う楚系とは明確に異なるが、

「右」の「口」を「工」に従う例は晋系文字にも見いだされる〔図2〕。

〔図2〕「左」・「右」の形体

楚系	晋系	『祝辞』	曾侯	
 包山228	 三茶壺	 02	 127	「左」
 包山133	 右使銅形器	用例不見	 144	「右」

さらに書法面でも、曾侯乙墓竹簡には楚系にみえる右廻転の運筆とともに、「良臣」・『祝辞』と同じ楔形構造の筆画が多見され、ちょうど両者の特徴を融合したような状況がうかがわれる。

このように『良臣』・『祝辞』を比較資料として用いる

ことにより、曾侯乙墓竹簡と晋系文字との密接な関係が浮かび上がってくる。曾侯乙墓竹簡については、こうした国別問題とともに戦国早期という時代的要因も考慮する必要があるが、これらについては、筆者の今後の課題としたい。

### 注

- (1) 荆門市博物館『郭店楚墓竹簡』（文物出版社、一九九八年）
- (2) 郭店簡・上博簡を中心とした国別問題については、周鳳五「郭店竹簡的形式特徴及其分類意義」（『郭店楚簡国際学術研究会論文集』第五三～六三頁、湖北人民出版社、二〇〇〇年）、馮勝君「郭店簡与上博簡対比研究」（綏装書局、二〇〇七年）、蘇建洲『《上博楚竹書》文字及相關問題研究』（萬卷樓、二〇〇八年）等を参照。
- (3) 馮勝君「郭店簡与上博簡対比研究」第二五〇～二五四頁（前注2）。
- (4) 清華簡『筮法』における晋系文字との関連については、李守奎「清華簡《筮法》文字与文本特点略説」、《深圳大学学报（人文社会科学版）》第三十一卷第一期、第五八～六二頁、二〇一四年参照。
- (5) 楚系文字の書法様式については、拙稿「戦国簡牘文字にお

ける二様式」〔第四回国際書学研究会記念論文集 国際書学研究／2001〕、萱原書房、二〇〇〇年、浅野裕一編『古代思想史と郭店楚簡』第三二九～三五二頁、汲古書院、二〇〇五年再收〕 参照。

(6) 『良臣』と『祝辞』との同筆・同冊関係については、清華大学出土文献研究与保护中心編 李学勤主編『清華大学藏战国竹簡(参)』第一五六頁(中西書局、二〇一二年)に指摘がある。

(7) 以下、本稿における『良臣』・『祝辞』の検討は『清華大学藏战国竹簡(参)』(前注6)の図版および积文・注釈による。なお积文・注釈の担当は、『良臣』が沈建華氏、『祝辞』が李学勤氏である。

(8) 『清華大学藏战国竹簡(参)』下冊、第一五六頁(前注6)

(9) 劉剛「清華参《良臣》為具有晋系文字風格的抄本補証」(復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、二〇一三年一月十七日)  
(10) ※を付した文字について、晋系文字との関係を指摘する先行研究は以下のとおりである。

・『良臣』[A類] ④李守奎「楚文献中的教育与清華簡《繫年》性質初探」第二九八～三〇〇頁(復旦大学出土文献与古文字研究中心編『出土文献与古文字研究(第六輯)』復旦大学出土文献与古文字研究中心成立十周年紀念文集』上冊、上海古籍出版社、二〇一五年)、⑤⑦⑩劉剛「清華参《良臣》為具有晋系文字風格的抄本補証」(前注9)、⑥『清華大学藏战国竹

簡(参)』第一五六頁(前注6)、『祝辞』[A類] ②劉剛「清華参《良臣》為具有晋系文字風格的抄本補証」(前注9)

(11) 簡9の下部右端にみえる墨点は句読号であり、飾筆ではない。

(12) 林宏明『戦国中山国文字研究』第三六〇頁(台湾古籍出版有限公司、二〇〇三年)

(13) 湯志彪編著『三晋文字編』第四八三頁(作家出版社、二〇一三年)

(14) 蘇建洲「初説清華三《周公之琴舞》・《良臣》札記」(武漢大學簡帛研究中心簡帛網、二〇一三年一月十八日)

(15) 劉剛「清華参《良臣》為具有晋系文字風格的抄本補証」(前注9)。

(16) 文献別の用字と簡号は以下のとおりである。

『良臣』……成王(簡5)・恭王(簡11)・昭王(簡5)／『楚居』……成王(簡9)・葬王(簡11)・邵王(簡12)／『繫年』……成王(簡29)・葬王(簡77・簡90)・龍王(簡85・簡86・簡87)・邵王(簡82・簡102)／上博四『成王為城濮之行』……成王(簡1)／上博四『昭王毀室』……邵王(簡1・簡5)

(17) 文献別の用字と簡号は以下のとおりである。

『良臣』……齊桓公(簡6)・季王句賤(簡7)・大宰(簡11)／『繫年』……齊桓公(簡20)・戊公句賤(簡10)・大判(簡83・簡131)／上博四『東大王泊旱』……大判(簡10・簡11他十三例)

(18) 張守中撰集『中山王罍器文字編』第六五頁(中華書局、一九八一年)

(19) 戦国期における「桓」の用字差異については、周波『戦国時代各系文字間の用字差異現象研究』第一〇〇～一〇二頁(綾装書局、二〇二二年) 参照。

(20) 『清華大学蔵戦国竹簡(参)』下冊、第一六三頁(前注6)

(21) 上博簡には、「緇衣」・「性情論」・「互先」・「采風曲目」・「曹沫之陳」・「鮑叔牙與隰朋之諫」・「吳命」・「成王既邦」・「命」・「拳治王天下」などに通常の楚系文字とは異なる左右に出る形体がみえるが、「命」以外はいずれも他地性文献であり、非楚系要素が混在した例と見なされる。

(22) 湯志彪編著『三晋文字編』第一六八二頁(前注13)

(23) 何琳儀『戦国古文字典—戦国文字声系』上冊、第五四四頁(中華書局、一九九八年、二〇〇四年重印)

(24) 『郭店楚墓竹簡』第二〇六頁、注釈(九) 参照(前注1)。  
なお「語叢二」は齊魯系の文字の特色をそなえたテキストであることが馮勝君氏によって明らかにされており(前注2)、この「休」字も齊魯系に属すると見なされる。

(25) 戦国期における「弱」の用字差異については、周波『戦国時代各系文字間の用字差異現象研究』第一四二～一四三頁(前注19) 参照。

(26) 『武王踐阼』簡8「鑑(盤) 名(銘) 曰、與其弱(溺) 於人、



寧弱(溺) = 於 = 宋(淵) = 猶可游、弱(溺) 於人不可求(救) (27) 何琳儀『戦国古文字典—戦国文字声系』第三〇九頁「汧」(前注23)

(28) 中山王鼎銘文「寡人暗(聞) 之、獲(與) 其汧(溺) 於人施(也)」

(29) 何琳儀『戦国古文字典—戦国文字声系』第三二六頁「休」(前注23)

(30) 『説文解字』十一上、水部に「休、没也。从水人、讀與溺同」とあり、段注に「此沈溺之本字也」という。

(31) 劉剛「清華参《良臣》為具有晋系文字風格的抄本補証」(前注9)。劉剛氏が挙げる「又」字の例を見ると、晋系の「侯馬」や「二十七年大梁司寇鼎」の最終筆は「良臣」にくらべてやや曲線がまざっており、むしろ楚系に例示された「芮良夫24」に近い。いずれにしてもこの「又」字のみによって、兩篇と晋系文字との文字風格上の共通性を言うことは困難であろう。

(32) 同一字で形体が異なる数少ない例外に「為」字がある。「良臣」の一例(簡11)は、「祝辞」の二例(簡3・簡4)はに作り、後者は前者の略体と見なされる。この二つはいずれもこれまでに知られていない形体であるが、篇ごとに異なるのは、依拠したテキストを反映するものであろう。

(33) 楚系文字の筆画の構造については、拙稿「戦国簡牘文字における二様式」(前注5) 参照。

- (34) 湖北省博物館編『曾侯乙墓』上下二冊(文物出版社、一九九九年)、李學勤『東周與秦代文明(增訂本)』第一三九頁(文物出版社、一九九一年) 參照。

- (35) 何琳儀『戰國文字通論(訂補)』第一六八頁(江蘇教育出版社、二〇〇三年) 參照。

- (36) 馮勝君『郭店簡與上博簡對比研究』第二六七頁(前注2) 參照。

【參考文獻】

【戰國文字資料】

- 何琳儀『戰國古文字典(戰國文字聲系)』中華書局、一九九八年、二〇〇四年重印

- 湯餘惠主編『戰國文字編』福建人民出版社、二〇〇一年

- 馮勝君『郭店簡與上博簡對比研究』綉裝書局、二〇〇七年

- 周波『戰國時代各系文字間的用字差異現象研究』綉裝書局、二〇一二年

【楚系資料】

- 李守奎『楚文字編』華東師範大學出版社、二〇〇三年

- 張光裕主編『郭店楚簡研究 第一卷文字編』藝文印書館、一九九九年

- 李守奎· 曲冰· 孫偉龍編著『上海博物館藏戰國楚竹書(一一五)文字編』作家出版社、二〇〇七年

- 主編 饒宗頤· 副主編 徐在國『上海藏戰國楚竹書字匯』北京師範大學出版集團· 安徽大學出版社、二〇一二年

- 李守奎 賈連翔 馬楠編著『包山楚墓文字全編』上海古籍出版社、二〇一二年

- 李學勤主編 沈建華 賈連翔編『清華大學藏戰國竹簡【壹】參』文字編』中西書局、二〇一四年

【晉系資料】

- 張守中撰集『中山王璽器文字編』中華書局、一九八一年

- 艾蘭· 邢文編『新出簡帛研究』口繪· 圖版四 溫泉盟書(圖版十

- 七 溫泉盟書、文物出版社、二〇〇四年

- 山西省文物工作委員會編『侯馬盟書(增訂本)』山西古籍出版社、二〇〇六年

- 中國法書全集編輯委員會編『中國法書全集 第1卷 先秦秦漢』

- 三八 河北平山中山王璽墓璽書玉器、文物出版社、二〇〇九年

- 西林昭一責任編集『簡牘名蹟選10 河南· 山西篇』溫泉盟書1

- 1-7、侯馬盟書1-7、二女社、二〇一二年

- 湯志彪編著『三晉文字編』全六冊、作家出版社、二〇一三年

【齊系資料】

- 孫剛編纂『齊文字編』福建人民出版社、二〇一〇年

- 張振謙編著『齊魯文字編』全六冊、學苑出版社、二〇一四年

〔付記一〕 本稿は、二〇一四年十二月二十六・二十七日に大阪大学で開催された「第五十六回中国出土文献研究会」における筆者の発表「戦国簡牘文字の書法様式に関する試論―清華簡『良臣』・『祝辞』の文字と書法―」を骨子とする。また本稿は、JSPS 科研費2420466の助成による研究成果の一部である。

〔付記二〕 投稿後に、劉剛氏の論考「清華参《良臣》為具有晋系文字風格的抄本補証」が『中国文字学報 第五輯』（二〇一四年七月）に再録されていることを知った。再録版では「二《良臣》也具有楚文字特徵」・「三余論」・「結論」が加えられ、「結論」において、『良臣』は楚人が晋系の底本を用いて書写したものであるとの見解が明示されている。